



Title	在日ベトナム人社会の研究
Author(s)	川上, 郁雄
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40924
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	川上郁雄
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 13475 号
学位授与年月日	平成 9 年 12 月 16 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	在日ベトナム人社会の研究
論文審査委員	(主査) 教授 杉原 達 (副査) 教授 中村 生雄 教授 土岐 哲 助教授 桃木 至朗

論文内容の要旨

本論文は、「インドシナ難民」の中で多数を占めるベトナム人の、日本における定住適応過程とその生活世界に関する研究である。A 4 判で、218頁（本文192頁、参考文献7頁、付論19頁）からなる本論文は、400字詰原稿用紙に換算して約785枚に相当する。全体を概観するならば、序章に次いで、理論、調査概要、研究方法を論じた第1～2章が配された後、本論部分にあたる第3～7章で、多様なアプローチを交錯させつつベトナム人社会の諸相が分析された上で、終章において在日ベトナム人社会の展望が論じられるという構成になっている。

次に各章の論旨を述べる。

序章では、現代日本社会における異文化との共生の実現という基本的な問題意識が提示され、そのための「マイノリティ研究の基礎資料の提出」という形で本論文が位置づけられる。

第1章「理論研究」では、難民研究の意義と目的、および概念規定を問題とする。まず難民問題が、トランスナショナルな越境文化とヘテロな複合社会によって構成される現代世界に特徴的な問題に他ならず、ひとつの国民国家の枠内での民族集団研究というアプローチではとらえられないことが示される。次に研究史を整理し、難民の数量的把握にとどまる段階から、「難民個人の体験」に光をあてる傾向、さらに「難民の持つ歴史的・文化的な背景とホスト社会との関係を軸に、難民の定住生活を把握しようとする傾向」へとアプローチが多様に展開している最新の研究状況を概括する。そして難民の定義の困難さに十分に配慮した上で、在日ベトナム人難民を、難民条約によって規定されたいわゆる条約難民だけでなく、それ以外のルートで渡日したベトナム人難民、さらに第二世代や日本国籍を取得した「帰化」者をも含めて、より広く考えることが在日ベトナム人社会の実態に即するものであることが論じられる。

第2章「調査の概要と研究視点」によれば、1989～90年の第1次調査、当時の被調査者に対して実施した1994～96年の第2次調査、さらにベトナム、オーストラリア、アメリカでの調査が、本研究の資料的基礎となっている。同一家族の5年間にわたる推移の確認、ベトナムとのつながりや祖国観などの探究、日本からさらに別の地へ再定住していた家族の追跡というような調査目的は、上述の先行研究の整理をふまえて、難民の生活世界を動的かつ多面的に分析しようとする本論文の立場に規定されたものである。調査方法としては、文化人類学的方法のみならず、社会学

的方法や社会言語学的方法をも織りまぜ、面接、参与観察、質問紙による調査などを統合するアプローチを重視する。また対象の複雑さのために、分析は、来日前の諸条件、日本の社会環境、国際情勢といった諸側面から総合的に進められるべきことが指摘される。

第3章「ベトナムの歴史と文化」は、ベトナム人の日本定住にいたる過程や定住生活に関わる諸問題、とりわけ生活意識や家族形態などを理解し分析する上で必要とされるベトナムの歴史的・文化的背景を論じる。ベトナムでは、地理的環境および歴史的経過に規定されて各地に独自の地域性が育まれてきた。こうしたベトナムの多様性は、フランスの植民地支配を通じて固定化されたが、とりわけベトナム戦争の勃発と激化によって、南北対立の構図に、さらに階級、宗教、エスニシティといった諸要素が重なり、とくに南部において錯綜した形で現れるようになったことが主張される。さらに南北の統一、社会主義化、第3次インドシナ戦争と続く困難と混迷の過程で、これらの諸要素が複雑に作用しつつ、大量の難民流出に結果したと論じて本章は閉じられる。

第4章「在日ベトナム人社会」は、人口動態、コミュニティ、社会的ネットワークの分析を通じて、在日ベトナム人の存在形態の全体像を示す。在日ベトナム人のなかで難民の比重はきわめて高いものであり、その人口構成をみると、脱出の事情から青壮年男子が多いが、近年は配偶者呼び寄せを背景に女性比が増大している。居住は、神奈川県、埼玉県、兵庫県といった大都市近郊に位置する下請けの中小零細企業の多い地域への集中が目立つが、日本定住後、独自のネットワークを通じてさらに移動するケースもある。集住地域においては、他のインドシナ難民との棲み分け、本国での出身地域やエスニシティによる棲み分けもみられるという。こうしたコミュニティの形成および変容には、血縁・地縁のネットワークに加えて、政治的、宗教的要素が大きな意味をもつことを、大阪と兵庫の2地域の事例を中心に示している。さらに1980年代以降の国際情勢の転換や祖国の経済復興が、コミュニティやネットワークの展開を含む在日ベトナム人の生活戦略に影響を与えていると主張される。

第5章「在日ベトナム人の家族」では、前章までの全般的な考察をふまえた上で、聞き取り調査を活用しつつ、個々の難民家族および個人に即して定住適応過程を追跡し、家族観の変容に焦点をあてながら在日ベトナム人社会の具体的な把握を試みる。分析によれば、出国前に抱いていた移住先での生活イメージと、日本での現実の生活との違いが、初期段階での不適応を引き起こす。また難民家族は、心理的には他の地の親族と結びついており、とくに祖国の親族からは拡大家族の一員としての援助が期待されるが、その経済的・精神的負担は大きく、適応過程に深刻な影響を与えている。こうした状況の改善のために種々のネットワークが活用され、家族や親族の再結合やコミュニティの形成がはかれる。定住地では核家族化が進行する中で、仕事や地域生活における女性の相対的地位の向上、親子の言語生活の質的变化等により、伝統的な家族関係の動揺がうかがわれる。さらに日本での教育を受けた若者たちは、家族観、結婚観、祖国観等において、親の世代とは異なる感覚をもつ世代として成長しており、在日ベトナム人社会の多様化の一層の進展が予想される。

第6章「言語生活と言語教育」は、子供たちの日常のバイリンガリズムの実態を論じる。調査を通じて明らかになった点は、子供たちが家庭の内外でベトナム語と日本語の使い分けをしており、父母および年長者とはベトナム語で、兄弟姉妹および同年齢以下の相手とは日本語あるいは両言語併用で話す子が多いこと、日本語のほうが話しやすいと感じる子の比率が高く、自己表出的場面でも日本語あるいは両言語併用の傾向がみられること、ベトナム語は日常会話で使用されるが、読み書きを含む自己表現の手段にはほとんどなり得ていない状況の一方で、日本語習得には困難を感じている子が多い、といった点である。こうした言語生活のあり方は、まず父母の言語意識や民族的アイデンティティ、次に学校や地域生活で子供たちを取り巻く日本人の意識や態度、そして難民に対する日本人の一般的な見方、といったいくつかのレベルによって影響を受けていると説く。

第7章「日本社会におけるベトナム人」では、まず神戸市のベトナム人集住地区における日本人地域住民の意識調査から、地域での日常的接触は希薄であり、日本側は主に間接的な情報によって、彼らがよく働いているという印象をもちつつ、固まって生活し日本人とつきあおうとしないこととみていることを明らかにする。次いで、定住ベトナム人の意識をさぐるために、「脱出」「帰化」「越僑という規定」がベトナム人にとってもつ意味が論じられる。「海外脱出」は、社会的上昇を得る家族ぐるみの生活戦略であるとともに、「難民としての脱出」は、祖国と自己および家族とを結

びつける契機としても意味を持つこと、「帰化」は、難民であるゆえの諸制限を克服する方便として位置づけられる傾向があること、そして在外ベトナム人を意味する「越僑」という表現には、一般ベトナム人の羨望とねたみ、差別意識が混じった複雑な感情がこめられており、そのように本国からみられることを意識せざるを得ない在日生活であることが指摘される。その上でこれら3つのキーワードを考慮しながら、1990年代の在日ベトナム人の生活世界を、ケーススタディに即して詳細に記述する。

終章「在日ベトナム人社会の展望」では、在日ベトナム人社会を相対化するために、オーストラリアのベトナム人社会を分析し、両者の相違点として異文化を受容する社会的環境の蓄積を指摘する。次いで、日本からさらにオーストラリアやアメリカに再定住していった若いベトナム難民たちの心性を、聞き取り調査に基づき具体例に即して叙述する。最後に在日ベトナム人社会の最大の特徴を「日本という国民国家の中であって、そこから外へ広がるネットワークによって生活世界と思考方法が支えられていること」に求め、国籍に規定された国民像から地域住民像への転換が、「共生」をすすめる上で重要であるという立場から、彼らを「在日ベトナム難民」から「在日ベトナム系住民」と呼びかえることを提案する。

論文審査の結果の要旨

「国際化」がさまざまなレベルで進展している今日の日本社会にあって、外国人の流入と定住をめぐる問題は、ますます重要となってきた。日本における定住外国人問題に関する調査研究は、在日朝鮮・韓国人や中国人については一定の蓄積があるとはいえ、近年急速に拡大している多彩なエスニシティ集団に関しては、理論的にも実証的にもなお層が薄い。進行中の定住化の実態把握が先決であり、さまざまな形で生じる具体的諸課題への迅速な対応が求められるという状況に規定されて、こうした調査研究においては、異質な歴史的・文化的背景をもつ諸集団を日本の国家や社会にどのように統合していくのかに大きな関心が払われ、実践的な政策提案に議論が収斂する傾向がみられる。

このような状況の中で、本論文は、次のような評価すべき特徴を有している。

まず第1に、在日ベトナム難民は、単にベトナムから日本へ移動してきただけではなく、一時帰国も含めて祖国との関係をもっており、また日本からさらにオーストラリアやアメリカへも再移住していく可能性と現実性を有した流動的存在であることを正面から認識し、日本における定住状況のみならず、故国や再移住先の状況をも視野におさめて、長期的かつ広大な展望のもとで在日ベトナム人の実態を把握した点に特徴がある。国境を越えて移動する難民のネットワークを、国境を越えて調査分析するという、きわめて困難な課題に取り組み、相当の成果を提示したことは、高く評価されるべきである。また問題の複雑さや国際性に鑑み、文化人類学的方法を中心しつつ人文社会科学の諸分野の分析方法を参照し、それらを意識的に総合することに留意している点も、研究上妥当な配慮とみることができ

る。第2に、ベトナム難民への個人的な聞き取り調査を積み重ねることによって、彼らの生活世界をいきいきと提示した点が評価に値する。本論文で詳述された8例のライフ・ヒストリーは、いずれもそれぞれの顔をもった肉声の記録であり、安易な一般化、数量化を許さないものとして構成されている。とはいえ、そこに共通するのは、家族の成員がいくつかの国家に分かれて居住し、関係を維持しながら生活している現実であり、そのことが希望でありまた重荷ともなっており、彼らの複雑な内面的世界を形成している点、そして越境する家族という現実が彼らの生活戦略に深く影響している点である。こうした分析は、申請者が、日本とベトナム、日本とオーストラリアというように、複数地域にまたがって同一人物を追跡し、時間をかけて内的世界にふみこむ調査をおこなった成果に他ならない。このような調査分析をふまえた上で打ち出される「ディアスポラであるがゆえに不安定な側面を持つ在日ベトナム人の生活の理解なしに、これからの在日ベトナム人社会と日本社会のあり方の議論へは進めない」という主張は、今後の日本の社会と文化を考える上で、傾聴すべき重要な問題提起となっている。

そして第3に評価すべきは、ともすれば一つのまとまりをもったエスニック・グループとして一括されがちな「在日ベトナム人」を、その多様性においてとらえている点である。出身地域、来日時期、政治的立場、エスニシティ(とくに中国系)、宗教(とくにカトリック)、等々の差異や特徴が、在日ベトナム人の中のさまざまな社会的ネットワークの形成と消滅に関わっていることを明らかにした点は重要である。さらに注目すべき指摘は、こうした多様性が、「帰化」や日本人との国際結婚などを通じて、国籍を越える形で広がっている事実である。またこれと関連するが、子供たちの成長につれてバイリンガルな言語生活をもたらす家庭内での諸問題や、世代間の価値意識のギャップに関する指摘も、フィールドワークの成果といえよう。

本論文のこれらの特徴は、難民をしばしばマスとして扱い、「貧しい人々」といった固定的なイメージでとらえがちな日本社会の一般的傾向を払拭する力をもっており、この分野におけるパイオニアワークとして高い評価を受けるに値するものである。

とはいえ、本論文には指摘されるべき問題点も少なくない。

まず第1に、本論文の表題は「在日ベトナム人社会の研究」となっているが、論述の力点は、個人と社会を媒介する存在としての家族にとくに注目し、国境を越える家族ネットワークの調査分析を通じて、在日ベトナム人の生活戦略を解明するところに置かれている。その試みは上にみたように大いに成功しているといえるが、在日ベトナム人を、一方で国際関係の中に、また他方で日本社会の中に構造的に位置づけるためには、なお一層の理論的考慮とフィールドワークの積み重ねが求められるところであろう。

第2に、定住ベトナム人を、他の在日外国人との比較の中で論じた箇所が少ないことである。現在の日本では、さまざまなエスニック集団が、それぞれの歴史的背景とネットワークをもちながら定住化への努力と試行錯誤を重ねている状況であるが、そうした中で定住ベトナム人の場合の独自の位置について、他との比較を念頭におきながら、明示的な形で言及することが必要であろう。定住ベトナム人の多様性を指摘することは、他のエスニック集団の多様性との比較を排除するものではない。とりわけ終章の末尾で、「在日ベトナム難民」から「在日ベトナム系住民」への転換という展望を出している以上、この論点は本論文にとって不可欠な一部を構成するはずであり、惜しまれるところである。

第3に、フィールドワークで得た資料の分析と提示方法に、やや単純化のきらいがみられる点である。たとえば言語使用の実態に関する調査についていえば、特定の状況のもとで、具体的にどのような言葉がどちらの言語で発せられたのか(あるいは、いわゆる中間言語であるのか)という点について、より多面的な分析が必要とされるであろう。また調査対象者に関する多くの情報については、プライバシーへの配慮は当然としても、基礎的データとして提示する工夫がなお可能ではないかと思われる。

第4に、個々の論点について検討不足と思われる箇所がある点である。とりわけベトナムの村落社会や家族システム、あるいはベトナム戦争などについては、いっそう細やかな認識が求められる。また本論文にとって重要な概念のひとつとなっている「ベト・キュー(越僑)」についても、より掘り下げた総合的な分析が必要とされる。

以上のように問題点はいくつも存在しているが、それらの多くは、こうした総合的な問題を総合的な視野に立って分析しようとする場合には避けられないものであり、今後、より深めた形で論をすすめることによって、解決できると考えられる。

よって、本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するに十分な価値を有するものと認定する。